

留学生と日本語系教師志望学生の双方で作成する 日本語教育・国語教育に関する教材開発プロジェクトの取り組みについて

Activities for developing Japanese-related teaching material created by international students and students aiming to be Japanese-language teachers

市 原 乃 奈

1. はじめに

筆者は「moodleを利用した日本語eラーニングの構築」を本学に起案し、現在はゼミ生が中心となって取り組んでいる。この試みは、SGL・SDL・PBL¹を柱としたAL教育を念頭に置いており、ここでは、教育実践、改善内容、教育効果とその分析結果について報告する。当該学生の特徴は日本語教師・国語科教諭を目指す日本人学生と日本語能力が日本語検定試験N3以下の留学生であり、LMSにて教材評価等のコミュニケーションを図っている。当初は日本語教育教材に限定していたが、国語教育教材の開発にも派生した。学生自身で「甲斐」を見出せたことが結果に繋がっていると考えられる。

2. 教育改善の目的・目標

本学では、学内の教育改革に取り組む教員または組織を財政的に支援するための学内教育改革に係る取り組み（「教育改革推進事業」）を学長裁量費として予算化し、学長を中心にした教育改革を推進している。その支援制度を利用し、2016年～2017年に渡り、留学生サポートおよび日本語教師・国語科教諭（以下、「日本語系教師」と記す）を目指す学生の基礎知識の向上・演習の場の提供として、「moodleを利用した日本語eラーニングの構築」を行っている。この取り組みは、異なる二つのフィールド（留学生の中、日本語系教師を目指す学生の中）で発生している問題点を精査することからスタートしている。それぞれのフィールドが抱える問題点は、双方のフィールドが持つ情報と知識を活用することによって、「Win-Winの関係」が成立する可能性が高いことがわかってきた。以下、両フィールドで発生している主な問題点を記す。

【留学生フィールド】²

- ① 留学生へのサポート体制はまだ発展途上の状態にあり、留学生のニーズに対応しきれていない。
- ② 教職員の中には日本語教育と国語教育の区別がつかず、教材選択において不備をおこす者がいる。そのため留学生は言語としての日本語教材として示された資料に対し、困惑・混乱し

ている。

- ③ 自分自身の日本語能力を把握していない。
- ④ 大学入学後、授業以外で日本語を学修することがなくなり、日本語能力の向上が見られない。
- ⑤ 描いていた大学生活と異なる。(原因：日本語能力不足)
- ⑥ 日本人学生と交流したくてもできない。(原因：日本語能力不足)
疎外感・仲間に入れない。(原因：日本語能力・文化やマナーの知識不足)
- ⑦ 地域の周辺情報がわからない。(原因：表向きは資金調達のためのアルバイトであるが、日本語能力や日本事情の理解不足により情報を得られていないことが本当の理由)

【日本語系教師を目指す学生フィールド】

- ① 自分の知識が学修者に教えられるようなレベルになるのか、身につけているのか不安。
- ② 学修者が求める教材とはどんなものなのかわからない。
- ③ 自分が作成した教材のせいで自分が学修者に嫌われてしまったり、学修者がその教科まで嫌いになってしまったりするリスクがある。
- ④ 自分が作成した教材をチェックしてもらう機会がほぼない。
- ⑤ そもそも教職に向いているのかわからない。

これらを踏まえ、両者のPBL (Problem-Based Learning) の実践を支援する目的でmoodleを使用し、両フィールドを結びつける試みを行った。学修スタイルとして、具体的な学修課題を立て、少人数グループでプロジェクトを遂行していくPBL (Project-Based Learning) というものがある。しかし同じPBLであっても、本研究では文系ではあるが Problem-Based Learningを導入している。学生が中心となり、「反省+反復+生産」を個人、そして少人数で実践し、学修している。実践の場での問題解決は、教職に向けてのスキル獲得に適していると考ええる。

3. 授業概要と教育改善の内容

【授業概要】

今回、取り組みの対象とした授業科目について、表1に簡単にまとめた。日本語系教師を目指す学生は全て筆者の日本語学ゼミに所属する学生であり、中心となってこのプロジェクトに組んだ学年は2017年度の3年生であり、授業科目としては、「専門演習Ⅱ」を履修している学年である。3年生のゼミ生は合計9名で、うち2名は留学生のため、留学生フィールドの中で活躍してもらった。その他に、2017年度の「専門演習Ⅰ」を履修する2年生3名は「専門演習Ⅱ」の時間が空きコマであったため、作業は一緒に行っている。2017年度「卒業研究」を履修する4年生は、すでに「専門演習Ⅰ・Ⅱ」を学修しているため、LMSにて教材評価等のコミュニケーションを図るという追加事項以外は3年生より理解は深い。当ゼミでは、この取り組みに入る前に筆者作成の映像教材に出

留学生と日本語系教師志望学生の双方で作成する日本語教育・国語教育に関する教材開発プロジェクトの取り組みについて

科目名	内容	学年	参加人数
専門演習Ⅰ	日本語学の基礎 (他分野との関連と区別・日本語文法理論)	2	3名 全員が教職課程を履修中
専門演習Ⅱ	国語教育・日本語教育双方の知識を活かし、 両教育に有効な教材開発を行う。 卒業論文等の将来計画をたて、自分に必要 な文献を収集し、調査および発表を行う。	3	9名(うち2名が留学生) 【日本人学生について】 5名が教職課程を履修中 2名が日本語教育通信講座※1を履修中
卒業研究	これまで培った知識をもとに、卒業論文を完成 させる。	4	7名 1名のみが教職課程を履修中
日本語Ⅰ	留学生対象の科目(N3合格が目標)	全学年	短期大学学生31名(全員1年生) 大学生12名(1年生8名・2年生4名)
日本語Ⅱ	留学生対象の科目(N2合格が目標)	全学年	短期大学生24名(1年生22名・2年生2名) 大学生2名(全員2年生)

表1 ※1はオーストラリア・シドニーに拠点を置く日本語教育専門機関WJLC(ワールドジャパニーズランゲージセンター)

演し、台本を与えれば拒まず、むしろもっと出たいという学生たちが過半数を占めていた。このようなことから、3年生が中心となって教材開発を行い、2年生が補助に入り、4年生が演者となり参加するという役割分担が自然とできあがっていった。「日本語Ⅰ・Ⅱ」は静岡英和学院大学短期大学部現代コミュニケーション学科の開講科目となっており、履修者の構成は、短期大学部の留学生と大学の留学生在が混在するクラスとなっている。学生の学修効果等を踏まえた適切な教育課程を編成した結果、静岡英和学院大学短期大学部現代コミュニケーション学科の授業が静岡英和学院大学に開放された。そして、その授業を2017年度のための期限付きで専任教員である筆者が担当することとなった。このような理由から日本語教育体制のさらなる強化が求められ、それとともに「日本語教育」と「国語教育」が似て非なるものであり、その差異について周知させる活動も筆者なりに行ってきた。表1に示した授業はSGL(Small-Group Learning)が成立している。

【教育改善の内容】

以下、図1は、今回の取り組みを可視化させたものである。留学生が行うことは、筆者が作成した日本語eラーニングへは必ず個人に付与されたIDでログインし、日々学修を継続することである。指定された宿題は課題提出機能を使って提出し、自分自身の学修記録を積み上げていくことを義務としている。日本語系教師志望の学生が行うことについては段階的に説明していく。

1：この取り組みの最初のPBL集中講義³では、教材開発を進めるための課題を提示する。この課題は、moodleを使用した日本語eラーニング16コース各20課とそれを10週行った留学生の学修状況・宿題の提出率と日本語系教師が直面する事例を提示する。ここで用いる日本語eラーニングは、留学生に対して実施した予備調査やプレースメントテストの結果に基づいて、筆者が本学の留学生の日本語能力に適合するように設計を試みたものである。また、この事例については、日本語学校での出来事や実際に筆者を含む教職員が体験した事例を多く

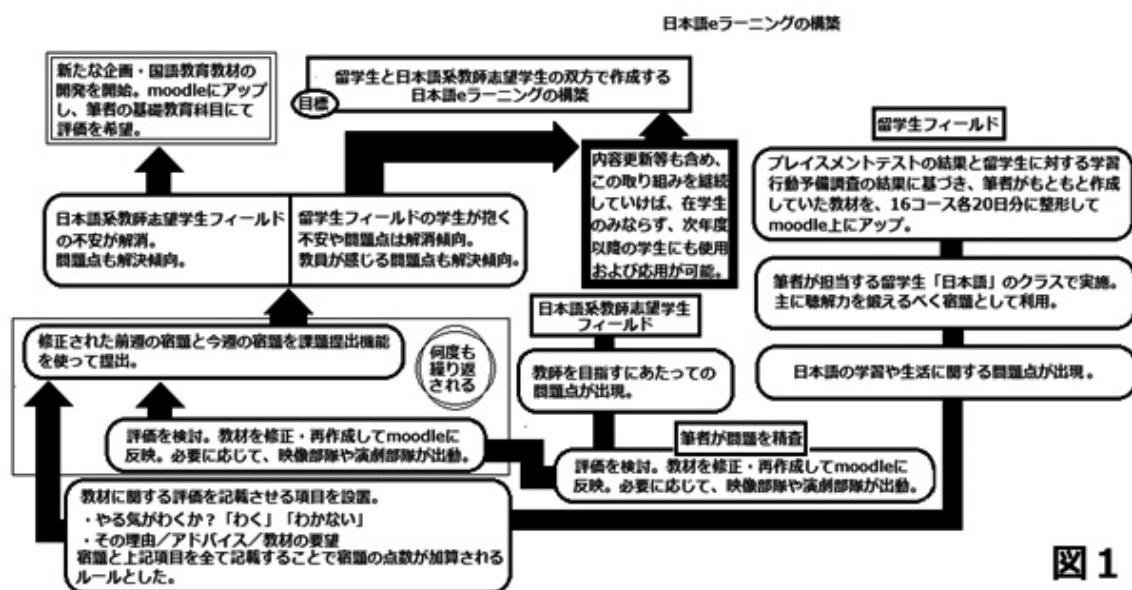


図 1

紹介する。目の前にある問題だけではなく事例を沢山紹介する理由は、これらの事例が発生する複雑な背景を理解し、問題解決のために何が必要となるか「問題解決能力」だけではなく、「危機管理能力」と「リスク管理能力」も合わせて身に付けていく姿勢を明確にするためである。

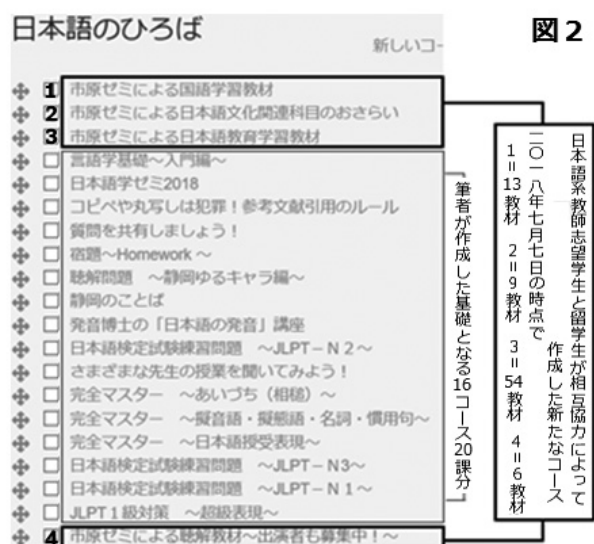
- 2：学生は多くの事例と照らし合わせて、問題点について個人作業にて「なぜなぜ分析」を開始する。1段階目（上記1・2以下同様）で調査した複雑な背景をもとに、その問題点の発生原因を仮説し、先行研究を用いて自分自身の解決方法を考える。
- 3：問題点について、各自が考えた仮説と解決方法を5人ずつのグループ（合計2グループ）⁴内で発表し合い、検討する。2段階目と3段階目では、SDL（Self-Directed Learning）を尊重している。この検討においてPBLが発生した場合には、SDLではなく、グループ全員で解決する。解決できない場合には、筆者から指導を受けてもよい。
- 4：2つのグループが導き出した問題点とそれに対する解決方法をもとに、各グループで教材を作成。筆者が作成した教材をベースにすることも可、新たなものを作成することも可とした。その際、評価・アドバイス欄を作成することとした。でき上がった教材はグループごとに発表し、質疑応答を経て改善が必要な場合は修正して2週間以内に日本語eラーニング上にアップする。

日本語系教師志望学生フィールドではこの1～4の作業を段階的に行う。留學生フィールドでは筆者作成のmoodle上の宿題と日本語系教師志望学生フィールドが作成した教材とその評価を行い、課題を提出する。これを繰り返し行うことを継続している。

4. 教育実践による教育効果とその確認

当初は日本語教育教材に絞り、日本語系教師志望学生フィールドと留学生フィールドに分けて問題点を精査し、目標に向けて紆余曲折しながら教育教材開発に取り組んでいた。常に筆者が念頭に置き、プロジェクト参加者に共有を図り続けた事項は以下の通りである。

- ①留学生の日本語能力を向上させる活動であること。
- ②日本語系教師志望の学生が国語教育と日本語教育の区別を明確に理解できるようにするための活動であること。
- ③両フィールドの将来的な不安が解消できるようにするための活動であること。
- ④本学の教職員の中で希望する者がいれば、自由に利用可能な教材作りを目指し、作成した教材をプールしていく活動であること。



以上をメインにしながらプロジェクトに取り組んでいた。目に見える成果としてあげられることは、留学生の日本語学修時間が格段に増えたことである。「日本語」の授業を前期後期ともに履修した留学生の日本語eラーニング上で算出される一人当たりの一週間の学修時間は、前期10週目では180.27分であったのに対し、後期10週目では431.55分となった。授業中も「とりあえず書いてみる」という習慣も身につけてきた。日本語能力試験ではなく、日本語検定を受ける留学生も現れた。

日本語系教師志望学生フィールドでは、教材作成過程でこのような目に見える反応があったため、国語教育教材作成にも着手し、その成果に対するフィードバックを得たいという要望も出てきた。さらに日本語教師のみ国語教諭のみを目指していた学生は「両方の教師を目指したい」と述べるようになった。現在のeラーニング内のコースの状況は図2のようになっている。太枠で囲んだ部分が今回の取り組みで得られた成果である。1は、今回の取り組みの副産物であり、2018年度後期の日本語リテラシー科目の中で筆者が日本人学生に対し、評価の依頼をする計画となっており、「2. 授業概要と教育改善の内容」で示した1～4の作業を段階的に繰り返し行っていく予定となっている。2は、日本語系教師志望学生フィールドで作成した教材に書き込まれた「教材の評価と要望」の内容を反映すべく、日本語文化関連科目、例えば筆者担当の「言語文化論」等の授業内容フォロービデオ、板書や日本人学生がとったノートの公開等を行っている。筆者は内容に誤りがないかのみをチェックし、あとは授業時間以外に学生が自主的に制作している。3は今回の取り組みの成果物そのものであり、SGL・SDL・PBLを経てでき上がった教材は54教材となった。4は、教材開発の

第3段階で発生したPBLに基づき、留学生自身が教材に登場すれば登場した本人も仲間の学修者も興味をもって日本語eラーニングにアクセスすると見込んで設定したコースとなっている。現在のところ、出演希望者は4人と予想を上回っている。

5. 結果の考察

教員側から留学生に対して学修に関するアンケートや面談を行っても、日本語能力を欠く留学生は、「こんなことを言ったら成績に響くかもしれない／恥ずかしい」という気が起こり、教員の前では私生活に関することは言えても、成績に関することは言いにくいようである。しかし、学生同士ではその逆の現象が見られる。留学生フィールドから、「実はカタカナが書けない／ほとんどの授業が聞き取れていない／教科書の購入方法が分からない」などの問題点が抽出できた。また、対面ではなくLMSにて教材評価等のコミュニケーションを図るため、誰かが気づけば教員を通して即座に質問に答えられたり、日本語教師志望学生に助けを求めたりしやすく、教員に対しても対面では言えないことを言えるなどの利点が見られた。そして、日本語系教師志望の学生は「教師」とはどういう職業であるのかを身をもって体験でき、今まで以上に自ら研鑽して習得することの必要性を理解したように見える。

AL教育とともにICTを活用した教育を試みたが、本研究とは別に多くの課題を孕んでいる。学生はパスワードの管理が十分にできない。そして文系学生は、スマートフォンは操れてもPCには疎く、今回の取り組みを見ていてもSNSを始めとするコミュニケーションツール上でのネチケットが徹底できていないばかりでなく、文字によるコミュニケーションの特徴についても理解が及んでいなかった。そのため、筆者はmoodleを利用した日本語eラーニング上に、学生自身が作成した教材を学生自身の手でアップさせるわけにはいかなかった。教材開発ばかりに目を向けてしまった筆者の失態である。これについては、次年度のPBL集中講義では最初に検討する課題として組み込み、すでに活動を開始している学生については、学生が取り組んでいる教材作成が一区切りつく時点で教員側からの問題提起として検討してもらうようにしたい。これらの点がクリアできれば、教員と学生双方の苦労が一つ減ることになるのだが、これには時間がかかりそうである。

6. 計画とその目標達成状況

市原乃奈（2017）では、

eラーニングに依存させてしまうと、自分で書籍を選ぶ機会とその力を奪うことにもなる。試行段階とはいえ、課題は多い。今後、教材をどのように蓄積し、汎用させていくか検討中である。そして、今後さらに構築を進めるにあり、本学図書館にある資料と重複しないものを提供していかなければならない。実現のためには筆者だけではなく、開発する側に協力者が必要となってくる。

留学生と日本語系教師志望学生の双方で作成する日本語教育・国語教育に関する教材開発プロジェクトの取り組みについて

その一環として、2017年度前期より日本語学・日本語教育学に関する専門演習履修者および筆者ゼミに所属する学生を中心として、本件に関するプロジェクトに取り組む計画を立てた。

日本人学生と外国人留学生が共に学んだ知識を共有し合いながら「日本語文法教材」や「日本語eラーニング」の構築を行い、互いの問題解決を図ることを目指すものである。

上記の目標を記した。これについて、2018年9月時点での目標の達成状況を確認する。

2018年3月に本学では卒業式が行われ、参加した多くの学生たちはこのプロジェクトからも巣立って行った。中には静岡英和学院大学短期大学部現代コミュニケーション学科から静岡英和学院大学人間社会学部へ編入した留学生も4名おり、このプロジェクトに時折参加している。また、2017年度の「卒業研究」を履修した学生は同様に卒業を迎えたが、それ以外の学生は進級し、現在はmoodle内に「日本語検定対策」というコースを新たに作りたいという申し出があり、2年生の日本人女子学生3名が活動を開始している。留学生の成果と成長ばかりを記してきたが、ここで日本人学生に目を向けてみたい。2017年4月からこのプロジェクトに関する取り組みが始まり、2018年9月現在で、約一年半が経過した。昨年度までは、日本語教師と国語科教諭の両方の資格取得に意欲を燃やす学生がほとんどであったが、将来設計に少し変化が生じてきたようである。前述の2年生の日本人女子学生と同じ学年の女子1名は、「教材開発を毎日行わなければならない生活には耐えられない」と吐露した。しかし、ミニドラマ⁵の撮影や発音に注意して朗読する教材に魅力を感じ、教職課程を履修するのをやめ、声優学校に通い始めた。同学年の男子学生1名は、教職課程の履修は継続するが教職を志望することをやめ、国際交流に関する職に就きたいという希望を持ち始め、積極的に外国人の集まる国際フェスティバルへスタッフとして参加したり、親善スポーツ大会に参加したりしている。3年生の男子学生1名は、国語教諭志望だったが、現在のところ日本語教師への憧れが強くなり、日本語教育能力検定試験等の学修に取り掛かり始めた。この活動を通して自分の将来の選択肢が増え、自分の適正とは何かを考える機会となったことがうかがえる。

eラーニング内のコースの設置やバリエーション豊かな教材庫として運営していくためには開発する側に協力者が必要であり、それをどのように育成していくか、また教材として実用可能にするためにはどのような取り組みが考えられるかが課題であった。学生自身が学生の側からの視点で作るミニドラマや日本語検定に関する練習問題は、教員には見えづかった教員側の問題点や欠点が盛り込まれ、教員が構築するプログラムの不足部分を補う形となっている。eラーニングの開発はチームのように行えるようになってきており、さらには、日本人学生が「自分ができること」・「自分がしてみたこと」など各人の意志に基づく役割分担も形成されつつある。この点においての協力者の確保に関する目標は概ね達成できたといえる。

次に示すのは、昨年度からこのプロジェクトに携わっている留学生合計11名について、自分自身で日本語の学修教材を選び、eラーニングに依存することなく日本語の学修を継続しているか、追跡調査を行った結果である。それについてまとめたものが表2である。留学生を①～⑬のようにナンバリングし、初級（N3が未取得の者で意思疎通が若干困難な者）、初中級（N3は未取得であ

目標	留学生 レベル	目標達成の有無・程度
eラーニングやアプリを用いて学習を継続しているか	留学生① 初級	eラーニングのミニドラマを、みんなで撮影したり、eラーニングのプリントをみんなで作成したりする以外は日本語の勉強をしていない。
	留学生② 初級	eラーニングの中の JLPT の過去問題や、みんなで作った練習問題はプリントアウトしてファイルに綴じている。綴じたままで復習していない。
	留学生③ 初級	eラーニングの中の自分の出演したミニドラマは何度も見ていて、家族や友達にも再生して見せているため、セリフは覚えた。それ以外は手を付けていない。
	留学生④ 初級	eラーニングの中の練習問題を留学生センターに持っていき、できないところをセンターの先生と一緒に確認するのに使っている。
	留学生⑤ 初中級	eラーニングも他のアプリも何もやっていない。ミニドラマを収録するときだけは日本人学生と話せるのが楽しいため参加は欠かさない。日本人の友達も増えたので、学校生活は楽しくなった。
	留学生⑥ 初中級	自分の関わった教材は、家族や友人に見せているため、eラーニングには頻繁にログインしている。しかし、JLPT に関するコースや授業のコースは全くやっていない。それ以外は、日本語の勉強はしていない。
	留学生⑦ 中級	自分では何をしたらいいのかわからないため、市原先生や日本人の仲間が教えてくれたものだけに集中して取り組んだ。みんなのおかげで N2 に合格できた。
	留学生⑧ 中級	お金もないし、市原先生が作った練習問題やみんなが助けてくれることは、絶対だと信じているので、eラーニングは市原先生のオフィスアワーの時間に行き、図書館で借りた「ビジネス日本語」の問題集は木曜日に実施して、わからないところは留学生センターに行って教えてもらっている。「ビジネス日本語」と「普通の日本語」は何がどう違うのかわからなくなってしまったので、eラーニングに解説を入れてほしい。
	留学生⑨ 中級	図書館にある練習問題も解けるようになってきたので、市原先生やゼミの先生、そして日本人の仲間がおすすめしてくれたジャンルのテキストを借りている。
	留学生⑩ 中級	eラーニングの漢字の問題はプリントだけでつまらないので、スマホで「imiwa?」と「Word Fireworks: Learn Japanese!」を実施中である。しかし、アプリだと、途中で課金されるので、eラーニングの中にある漢字問題を全部打ち出して、ノートに書いて漢字を覚えるようにしている。漢字ゲームのようなものを eラーニングの中に入れてほしい。
	留学生⑪ 中上級	最近、日本人が勉強している日本語の教材にも興味を持ちはじめた。まだ、N1 も合格していないが、eラーニング内の日本語検定や秘書検定の練習問題も見ている。日本語検定や秘書検定の問題を図書館で見てみたが、少し難しく感じたので、eラーニング内の問題ができるようになってからチャレンジしたい。
	留学生⑫ 中上級	「日本語資料研究」や「言語文化論」などの授業を撮影したビデオや、授業の復習ビデオはとても役に立つ。でも、市原先生の授業だけしかないので、他の授業もあったらいいと思う。他の大学の授業に関する映像はないか、インターネットで探して、あればそれを見て、自分の授業に役立てている。
	留学生⑬ 上級	全く eラーニングにはログインしていない。アプリも使用していない。ある程度日本語に自信を持てたので、ゼミで使っている日本語の勉強用ではないテキストを読んだり、日本のグーグルを使って検索するようになり、日常生活に心がけている。

表2 2018年9月時点での目標の達成状況

るが、意思疎通が図れる者)、中級 (N3 取得済みで N2 を目指す者)、中上級 (N2 取得済みで N1 を目指す者)、上級 (N1 は取得済みの者) のように並べ、現れた傾向を確認した。

留学生初級④以外の①～③は、このプロジェクトでの日本人学生との活動以外は一切日本語の学修をしておらず、また、自分の出演したミニドラマを自分の家族や友人等に見せる目的以外では eラーニングにログインしていない。ミニドラマに出演したことで日本語が上達したと誤解し、この状態に満足してしまうという良くない結果となった。留学生④については、ミニドラマのセリフがなかなか覚えられない、日本人学生が作る台本が読めないなどの「危機感」が生まれている。「自分の日本語能力のレベル認知を自ら行える」ようになることが次のステップへ進める条件となっているのだと解する。留学生初中級⑤⑥は日本語の学修を継続してはいないが、この活動を通して日本人学生の輪に溶け込んでおり、授業中の着座状況を見ても固まって着座する留学生集団の中にはおらず、日本人学生とコミュニケーションを楽しみ、冗談を日本語で言うなど、そこでの会話も流

留学生と日本語系教師志望学生の双方で作成する日本語教育・国語教育に関する教材開発プロジェクトの取り組みについて

暢になってきている。中級⑦～⑨に見られる顕著な傾向として、筆者と仲間を強く信頼していることがあげられる。ここに見られる図書館の問題集とは、教員が選書してリスト化した資料である。選書リスト以外にも、彼らにとって有益なものを図書館に買い入れているが、図書館に連れて行き、目の前にその資料があったとしても、彼らは筆者から促さない限り、これらの資料を手にとることはない。金銭的な問題からeラーニングに集中し図書館の選書リストのものだけを効率的に使うことは非常に賢い判断ではあるが、自らが選書リスト以外の資料を自由な発想で手に取り、自分に合うものはないか探求することこそが重要な行動なのであるが、それが自発的に実施できるようになるまでにはかなりの時間を要することが見込まれる。中級留学生⑩は、ひらがなやカタカナで書かれた文章を読み、理解することについては問題ないが、漢字がほぼ読めず、中級から脱出できずに2年が経過している。心理学を専攻することを希望していたが、専門用語が並ぶテキストを目にし、初級④の学生と同様に「危機感」が生まれている。専門のゼミに受け入れてもらうことを目指し、新学期から漢字の学修を集中して行うことを決意し、スマートフォン専用アプリ、「imiwa?」⁶「Word Fireworks: Learn Japanese!」⁷も用いて、通学の際に学修している。上記アプリをなぜ選択したのか尋ねると、「Google Vietnam」で「日本語」「漢字」「勉強」と入れると上位にランキングされるアプリだったからだという。「自立学修」の姿勢が見られるようになってくると、日本語のスキルが飛躍的に伸びていく。ここでは日本語習得にスポットを当てているが、学修者が主体性を持ち、自ら学ぶ力をつけていくこの学修スタイルは、この分野に限ったことではない。「Word Fireworks: Learn Japanese!」のように自分で問題が解けた「自信」を賛美するかのうように正解すると打ちあがる見事な花火は、学修に取り組む原動力となり、教師や仲間依存に教わるだけでなく、積極的な物事へのアプローチにも繋がっている。自立した学修習慣を身に付けることは、クリティカルシンキングのトレーニングにもなる。留学生のみならず日本人にも効果的なモチベーション維持の要素を精査していくという課題も新たに見えてきた。留学生⑪は中上級に入りたての学生で自立学修に踏み入ったところであるが、eラーニングへの依存度はまだ高い。依存度が高くなる理由として、「eラーニングにログインすればすぐに同時間にログインしている仲間が助けてくれる」「仲間で解決できないことは教員にSOSを出せる」という仕様になっているからである。利用する留学生にとっては日本語の学修以外に、「学修の孤独」「留学生特有の淋しさ」を解消してくれる機能ともなっており、誰かと繋がっていられることが幸せだという。留学生中上級⑫の学生はほぼ上級レベルであり、上級⑬の学生はもともとN1に合格した状態で本学に入学した学生である。両者に共通することは、母国の検索システムではなく、日本の「Google」検索システムを使って、日本語で入力検索している点がある。検索結果で解らない語彙が出てくれば、辞書機能を使って調べる習慣が身についている。

7. おわりに

日本語能力のレベルに応じて前述のような差異が生まれることは当たり前のことではある。しかし、このプロジェクトを通して見える留学生の日本語学修状況を分析した結果では、次のステップにレベルアップできる条件として、

- ①危機感の発生
- ②自分自身の日本語能力レベルの把握
- ③明確な目的と強い意志
- ④自立学修への試み
- ⑤日常において母国語でできることであってもあえてそれを日本語で試行する

以上のようなことが必須となっていた。特に大学は教育・研究機関であるため、日本語の学修をはじめ多岐にわたる活動で「自立」が求められる。今回の試みでは「eラーニングに依存させてしまうと、自分で書籍を選ぶ機会とその力を奪うことにもなる。」というかねてからの懸念が的中する形となってしまった。今後、筆者は上記の条件を取り込んだ教材開発を目指していくが、日本語学研究室のプロジェクトとして、学生が在学中に力を注いだ活動の一つとなるよう、筆者（教員）、日本人学生、留学生で協働を続けていきたい。

最後に、本研究にあたり、着任当初から本学の教授である中原陽三氏に学内システムのメンテナンスをはじめ、電子機器の操作やICT教育の壮大な理想話しにお付き合いいただくなど、多岐に渡りお世話になっている。中原氏のご協力がなければ、このプロジェクトは構想だけで終わっていたと思われる。心から感謝申し上げる。今回執筆した活動は中原氏と筆者の共同研究から派生したプロジェクトである。拙いながらも筆者が主任研究者となっており、共同研究のテーマは、「ICTを用いた主体的・対話的な学びのための教材開発ならびに教職員が快適にアクセス可能な学内システムの開発と提案」である。本研究も共同研究も筆者の学科だけではなく他学科の学生も興味を示し、協力してくれるまでになり、テーマに対する基盤づくりとして有効なモデルとなったと自負している。

今後、教員の移動や卒業等での参加学生の入替わりによって、「moodleを利用した日本語eラーニング」はもちろん、形になりかけてきたAL教育とICT教育が融合した基盤を風化させてしまうのは非常にもったいないことである。どの部分が応用可能でどの部分に刷新を要するかなど、次に引き継いでいく準備も新たな課題として検討していきたい。

¹ SGL：small group learning（小グループ学修）、PBL：problem-based learning（問題にもとづく学修・課題基盤型学修）、SDL：selfdirected learning（自発的学修・自己主導型学修）。また、Donald R. WoodsはPBLの構成要素として、PBL狭義の problem-based learning・small group learning・self directed learning・self assessed learning（自己評価型学修）を挙げている。

留学生と日本語系教師志望学生の双方で作成する日本語教育・国語教育に関する教材開発プロジェクトの取り組みについて

² ①～④は筆者から、⑤～⑦は留学生から挙げられた問題点を筆者とともに確認済み。

³ 医学・工学系で用いられる「チュートリアル」と同様だが、筆者の分野では「チュートリアル」という学術用語は適さないと判断した。

⁴ 「専門演習Ⅱ」履修の3年生7名と「専門演習Ⅰ」履修の2年生3名で、必ず2つの学年が混在するように2グループに分ける。1教材を手掛けている2週間の間はこのチームは継続。この活動は授業内では90分のうち60分を使用しているが、その間ゼミに所属する留学生は、提出課題の中に書かれている教材に対するアドバイスや要望を整理する作業を行っている。

⁵ 教員は「映像教材」としているが、学生たちで作成している映像教材は、本人たちが「ミニドラマ」と言っているためそのまま記載した。

⁶ 開発者：Pierre-Phi di Costanzo 内容：無料の日本語語彙や漢字を学ぶ辞書アプリ。辞書機能ともに、漢字検索機能も搭載。辞書機能では、文字入力欄にアルファベットで日本語を入れると、文字に合致した日本語や関連キーワードの自動検索が可能。漢字検索の機能では、漢字の書き順や読み方、さらにはドイツ語・スペイン語・英語などの意味解説も同時に表示。外国人だけではなく日本人にも有効なアプリ。

⁷ 開発者：mode of expression, LLC 内容：外国人向けの日本語学修ゲーム。日本語のリスニング問題や書き順問題が出る。正解すると花火が打ちあがり、お祭り気分も味わうことができる。花火のクオリティが高く、きらびやかな花火が夜空に光って、非常に美しいため、正解させてまた花火を打ち上げたいという気分させるアプリ。ひらがなから漢字まで勉強できるので、ステップアップしながら日本語を勉強できる。

<参考文献>

市原乃奈 (2017) 「さまざまなレベルが混在する日本語学習者を対象とした日本語eラーニングプログラムの構築について～静岡方言とそれを使用する日本人学生と日本語学習者の交流に着目して～」『紀要』16号 静岡英和学院大学静岡英和学院短期大学部 P57～P66

黒川清監修・徳田安春・本暢将編集 (監訳) Gordon M. Greene (編) 斎藤中哉・ワイ大学研修医他 (訳) (2005) 『臨床能力をきたえるハワイ大学式PBLマニュアル：全ての医師に求められる『問題発見・解決能力』をマスターする厳選症例!』羊土社

吉田一郎・大西弘高 (2004) 『実践PBLチュートリアルガイド』南山堂

Donald R. Woods (著) 新道幸恵 (訳) (2001) 『PBL Problem-based Learning判断能力を高める主体的学修』医学書院

<参考URL>

George Lucas Educational Foundation 「Project-Based Learning vs. Problem-Based Learning vs. X-BL」『George Lucas Educational Foundation』

(<https://www.edutopia.org/blog/pbl-vs-pbl-vs-xbl-john-larmer>) 最終検索日2018年7月7日

Maastricht University 「Problem-Based Learning at Maastricht University」『YouTube』

(<https://www.youtube.com/watch?v=cMtLXXf9Sko>) 最終検索日2019年1月22日